

羅臼町の地域創生と知床学

金澤 裕司

「学ぶ営みは一人ではじめて一人に戻っていく。はじめた自分と戻っていく自分との間に、たくさんの方が入れれば入るほど、学んだものは高くなり深くなる。」秋田県横手市でタブロイド版の週刊新聞「たいまつ」の発行を続けた、たむのたけじ氏の言葉である。

ESDについて考えるとき、いつもこの言葉を思い出す。

羅臼町は北海道東部の知床半島にある。人口は約5300人（2018年1月現在）で、今なお減り続けている。

2005年に世界自然遺産に登録された知床半島はおよそ百万年前の海底火山の噴火により海底が隆起し、第四紀に入ってから活発な火山活動によって1500m級の脊梁となる火山列ができあがった。したがって海底から直に険しい山が立ち上がっていて平地がほとんど無い。そのため羅臼町では半島基部の一部を除いて農地は無い。水産業がほぼ唯一の一次産業となっている。

このような羅臼町では2007年度から町内の3つの中学校（当時）と羅臼高校とで連携型の中高一貫教育が始められた。

私はその2年前、2005年に羅臼高校へ転勤した。転勤が決まった時、当時の教頭から真っ先に中高一貫教育の構成を検討する町の委員会に加わるように言われた。

検討委員会では、羅臼における中高一貫教育のデザインを中学校と高校、教育委員会の間で検討した。その結果、「学力向上」と「特別活動」、そして「総合的な学習」の三分野に重点を置いて一貫教育を進めることになった。その中でも総合的な学習は世界遺産地域として登録された知床半島についての自然環境学習とインターンシップなどを通して生徒に生き方や進路を考えさせるキャリア教育の二本柱から成っていた。このうちの地域学習を「知床学」と名付けた。これが知床学の誕生である。

生まれたばかりの「知床学」は、主に世界遺産地域知床の自然と羅臼町の歴史について学ぶもので、まだ知識移転型の学習から抜け出していなかった。知床の風土とそこでの暮らしや郷土史が相互にどう関連するか、また町の将来の姿がどうあったら良いか、そのために子どもたちは何を目標として学ぶかなどキャリア教育の本質的な理解も十分だったとは言いがたい。まだまだ社会的課題に応える学びにはなっていなかったのである。

この傾向は、すでに払拭したはずなのだが第一線の学校現場にまだ根強く残っていて、現時点での大きな課題の一つになっている。

一方、羅臼高校は中高一貫教育に答え、教育課程の大幅な改訂を行った。それは、就職型と進学型の二つのコースを設置し、同時に8科目14単位（当時）の学校設定科目からなる自然環境科目群を設けるという形をとった。自然環境科目群は「知床学」の学びに応じたものだった。高校の対応によって、後述する「知床学」として扱う範疇を大きく広げる契機になったと考えられる。

それに対して中学校はキャリア教育と自然体験学習を総合的な学習の時間のみで扱い続けたために、知床学の視野の拡大になかなか追いつけないという課題を引きずる結果にも

つながっている。

それはともかく、「知床学」が質的に大きく転換を始めたのは開始から二年経った2009年頃からである。きっかけは「知床学」がESDと出会ったことである。知床学を通じて羅臼町の教育にESDが採り入れられたのである。

ESDとの出会いは何度かあった。そしてそれぞれが関連している。

第一は、北海道教育大学釧路校で開講されていた「環境教育論」という授業を私が聴講できたことである。同大釧路校には北海道ESD推進センターが置かれていた。「環境教育論」では、主として同センターに所属する先生たちが講義を担当したが、この講義は市民大学講座として学外からの聴講も可能だったのである。教育委員会は、週一回の講義に私が通うことを認めてくれた。

もう一つは、文部科学省主催の課題別教員等海外研修事業でニュージーランドの環境教育視察に加わる機会を得たことである。この事業で日本の国内外でESDを研究、実践している研究者や教育者と交流することができた。

さらに2009年に知床ユネスコ協会が発足した。知床ユネスコ協会を通してESDについて学ぶことができたし、ユネスコスクールのネットワークを紹介された。そして、羅臼町の全幼稚園、小中学校、高等学校がユネスコスクールに加盟するに至ったのである。

短い期間に多発的に生じたこれらの出来事がすべてESDを推進する方向に力を働かせたことになる。私自身もこれらの経験を通して、数多くの国内外のESD研究者や実践者と交流し多くの貴重な示唆を受けることができた。

ユネスコスクールに加盟したとはいえ、とりわけて特別に新しい何かを始めたわけではない。新たな試みと言え、毎年一度、町内の全学校の生徒が集まって開かれる「羅臼町ユネスコスクール研究発表会」が開かれるようになったことくらいだろうか。もう一つの重要な変化は、それまでの中高一貫教育が幼稚園と小学校を加え、「幼小中高一貫教育」へと発展したことだ。幼小中高を貫くのはユネスコスクールとしての精神でありESDである。

この時から、それまで中高で行われてきたクマ学習は、幼稚園と小学校でも行われることになったし、それに対応したプログラムも開発された。また、小学校で行われてきた地域学習が、中高の「知床学」へと接続する形を整え始めた。

ちょうどその頃、立教大学の阿部治先生が羅臼町教育委員会をお訪ね下さった。阿部先生のご示唆によって、「知床学」が体験的な自然学習と地域学習からなる「地域学」であるという自覚が共有された。それが羅臼町と立教大学との出会いである。ただし、この段階では、まだESDが地域の諸課題の解決に役立つということは、まだ認識できていなかった。

その後、2016年10月に立教大学ESD研究所と羅臼町との間で、「ESD研究連携に関する覚書」が取り交わされ、羅臼町が直面する人口減少、経済の低迷、高校入学者数の減少などの地域諸課題解決のため児童生徒へのESDの浸透が重要なカギになることへの理解が次第に深まってきた。

ESDによって地域学習を進める中で、地域が直面する課題を子どもたちが理解し考えを深めることは、未来の主権者として重要であり、大きな教育的価値がある。

実は、これらのことは2017年2月に立教大学で開かれた対馬市、西伊豆町、羅臼町の3自

治体とESD研究所の合同会議や、その翌年度に羅臼町で開かれた情報交換会を通して明白になったことだ。羅臼町の町長部局の職員もこれらの会議に出席してこの思いを強くした。

さらに2017年11月、国際シンポジウム「ESDによる地域創生の可能性と今後の展開」というシンポジウムが開かれ、出席する機会を得た。このシンポジウムでは主に国内外の実践事例が報告されたが、地域にある自然資源を活用した種々の活動の事例が紹介されて、自然資源を生かした教育活動が経済活動に直接結びつく事例を知ることができた。

特に印象的だったのは、台湾の成龍（チェンロン）地区からの報告だった。高潮被害を逆手に取って多くの水鳥が利用する湿地を形成し、環境教育センターを作ったというものである。そして、狭義の環境教育のみに留まらず、湿地に巨大な美しいオブジェを置き、景観を引き立てる「チェンロン国際環境芸術プロジェクト」が紹介された。

ESDにおいては、芸術活動が自然や地球環境を大切に感じる心を育てる重要な役割を果たすと考えられる。環境教育の普及啓発と芸術祭による地域創生を実現した事例として印象的だった。

また、南ドイツのジュラ山脈山中の村であるシュヴェービッシェ・アルプにおいてユネスコの生物圏保存地域を活かした環境教育と伝統的な作物の栽培による村の活性化の事例、さらに日本国内の事例では長野県泰阜村におけるNPO法人グリーンウッド自然体験教育センターの活動が村の若者を増やし、雰囲気を変化させていった様子、長崎県対馬市での域学連携によるしまづくりの推進などの事例は、羅臼町のこれからの方向性を考えるうえで貴重な示唆であった。

これらに留まらず、「知床学」はその誕生から現在に至るまで、多くの先進的な事例の実践者や研究者との出会いを重ねてきた。そしてその都度優れた教訓を取り入れて内容を充実させながら継続されてきたと思う。

2018年度に向け、現段階で到達した知床学の基本精神を集約した「羅臼町知床学綱要」が書き起こされた。その「結論」は次のようにまとめられた。

台風の大型化、前線の異常な発達など気候変動の諸現象が続々と現れる。

人類の科学技術は 21 世紀に入ってさらに発展を加速している。同時に、貧困や飢餓、乳幼児の死亡、戦争など直面する問題も一層深刻化している。

科学は人類を幸福へと導くために発展するものと信じられていた。そして教育は科学の発展を支えてきた。

しかし、科学は、はたして希望に応えているか。時には大量の殺人を犯し、石油で、放射性物質で、回復不能な汚染を拡げ、次々に新たな問題を生み出した。そして、いま、地球の気候にまで影響を及ぼしている。いま、地球の気候は、人類の活動によって大きく変動しつつあるではないか。

学ぶ営みが人々の幸せを目指すものだとすれば、現在の教育は従来の価値観や社会の在り方との決別し、誤りの生じた時点まで立ち戻らなければならない。

知床学は、都市で生まれた体系ではない。流氷に削られた崖の続く海岸線から1600メートルの高さへと一気に駆け上る半島で生まれた。

それはオホーツク海を疾走してくる吹雪と季節風に研ぎ澄まされた岩峰が荒々しく並ぶ「最果ての地・知床」で生まれたのである。

知床学は、知床における場の学びでありながら知床のみにとどまらない。

より多く、より速く、より効率的に、より強いものに価値を見いだす従来の教育に断固として決別し、未来へと肉薄する。

従来の教育は、過度な競争を強制し、効率を追求し過ぎて、人と人、都市と地方、国と国を分断し数多の歪みを生み出すことに否応なく加担してきた。そして今や、地球規模で気候にまで影響を与えている。

今だけ、自分だけの利益を追い求めることを是とする価値観に基づく教育から将来の世代や世界中の人々の事を思いやれる価値観を重視する教育へ、自国や自分の利益だけを追求する教育から一人も取り残さず皆が幸福になり地球の自然を愛する教育へと方向転換する試みが、国際的にも広がっている。知床学もこの流れに合流する。

知床は地球規模で見れば小さな半島にすぎない。しかし、知床からの発信は、すぐれて鮮やかに人類の業（ごう）への倫理的挑戦の一つである。

知床をはじめ「僻地」と呼ばれる諸地域において、続々と誕生する地域学は、持続的な未来に向けて従来の教育を乗り越え、新しい大きな力を生み出すだろう。

知床学はこれら地域学の旗手となることを宣言する。

しかし、現実には疲弊する地域経済、人口の流出など深刻な課題が山積している。われわれはこれらの問題一つ一つにきちんと対峙していかなければならない。対峙して解決に向かうことのできる人材を育てること、これが知床学の最大の使命であろう。ESDによる羅臼の地域創生の道筋にはこれからも多くの困難が待ち受けているに違いない。だが、その一方で、高校の存続や地域の魅力化、住民の課題共有や意識の高揚など今後の方向性がESDによって鮮やかに示されている。

これは、ESDを意識した時から現在までの間に、多くの出会いがあり、出会った人々が羅臼町に熱い視線と有効で具体的な助言を贈ってくれた賜物である。

まさに「一人ではじめて一人に戻っていく」学びの営みとの相似ではないだろうか。

(かなざわ・ゆうじ 北海道羅臼町教育委員会自然環境教育主幹)